



# 「SOUL」とは真心！ 一品一品に込められた 「魂智和」の教え

てら さか せい ご ろう  
寺坂 清五郎 (1892～1973年)



## ■帝国チャック 株式会社

本社所在地：大阪府八尾市北久宝寺2-1-50 従業員数：159名 資本金：9,518万円  
創業：1926 (大正15) 年  
事業内容：各種デザインパワーチャックの設計・製作

## 12歳で親元を離れ鍛冶屋へ奉公に

1892 (明治25) 年11月、淡路島の南部、現在の兵庫県洲本市畑田組の山村で、後の帝国チャック(株)創業者・寺坂清五郎は生まれた。

村は海も近かったが、反り立つ断崖絶壁が続くため漁港や波止場が作れず、漁に出る者もいなかった。そんな環境のもと、寺坂家では自然林を伐採し、わずかばかりの用材と木炭製造用の薪採りをして、細々と生計を立てていた。これといった産業もなく、外部との接触も限られる村の若者たちは、伝え聞く文明開化の噂に誘われ、新しい生活を求めて次々と都会へ旅立っていった。

清五郎もその一人であった。ただし、故郷を離れることとなった胸中には、未来への希望や夢といった煌びやかな想いではなく、ただひたすら苦しい生活から抜け出したいという切実な願いがあった。

こうして、清五郎はわずか12歳で大阪・堺で鍛冶屋を営む叔父のところへ奉公に出ることとなった。12歳で親元を離れ、親族とはいえ他人の家に住み込みで働くこととなった少年の心中は、現代を生きる我々にはどうして想像できるものではない。それでも、清五郎は幾多の困難に堪えながら、自らに与えられた仕事をこなしていった。



電燈架設記念碑

故郷を愛した清五郎は、郷里のための寄付を惜しまなかった。特に、昭和20年代の点灯事業には率先して多額の寄付を行い、故郷に電気の明かりを灯した。その功績は記念碑によって現在に伝えられている。

## 日本初のスクロールチャック開発

一方で、寺子屋の先生をしていた祖父の影響から、清五郎は読書を好み、人一倍向学心に溢れていた。叔父の家を出てからは、鑄造所や鉄工所で働いて様々な技術を修得し、夜は難波実業補修学校の機械科に通って学びを深めていった。

1913 (大正2) 年、清五郎は当時勤めていた波田鉄工所の社長・波田徳松とともに旋盤用チャックの開発に着手した。その背景には、第一次世界大戦へと向かっていく政情不安なヨーロッパからの輸入途絶を見越した「機械部品の国産化」という時代の大きな流れがあった。

清五郎たちはアメリカ・クッシュマン社のチャックを見本に研究を重ね、1914 (大正3) 年、日本初の国産スクロールチャックを完成させた。

当時、海外製のチャックは非常に割高で、チャック2つで6尺旋盤が1台買ってしまうような値段設定であった。そこに目を付けた清五郎たちは、自らが開発した国産チャックを海外製の6割程度の価格で販売した。しかし、実績のない製品の売れ行きは芳しくなく、波田鉄工所の経営は非常に苦しい状態が続き、当面の経営資金を確保するために、やむを得ず製造したチャックをそのまま質屋に入れて食いつないでいた時期もあったという。

しかし、信頼できる製品であることが浸透し始めると、その評判と売上は徐々に好転していった。



初の国産スクロールチャック

「国産化の嚆矢」という荣誉だけでは商品として成立しないと考えた清五郎は、他の追随を許さない高品質な製品づくりにこだわり続けた。

## 創業と「SOUL」の誕生

**研**究・開発と勉学を重ねること20年あまり、1926（大正15）年、清五郎は波田氏が退いた後の鉄工所の人員その他一切を引き継ぎ、現在の帝国チャック(株)の前身となる寺坂鉄工所を大阪市浪速区に設立した。このとき清五郎は33歳の働き盛りで、「国産スクロールチャックの元祖」としても周囲に名の知られた人物になっていた。

1932（昭和7）年には、現在に続く自社ブランド「SOUL」の販売を開始。1938（昭和13）年には、現在地である八尾市北久宝寺に工場を移転した。決して、順風満帆なだけの経営ではなかったが、国産チャックのパイオニアとして優秀な製品をつくる寺坂鉄工所は、着実に社会からの評価を高めていった。

しかし、1941（昭和16）年、太平洋戦争が勃発すると状況が一変する。工場で主力を担ってきた従業員たちが戦地へ送られ、軍需主導による厳しい生産体制を敷かれることとなった。1945（昭和20）年、連日のようにアメリカの戦闘機が飛来するようになり、大阪をはじめ日本各地を焦土と化していった。そんな逼迫した状況を乗り切るため、清五郎は同業数社を束ね「帝国チャック株式会社」を設立した。

それから約4か月後、長く苦しかった戦争は終結したが、軍需工場に指定されていた帝国チャックは、アメリカ進駐軍により操業停止を命ぜられ、250名あまりいた社員の多くも離散の憂き目にあうこととなった。長年苦労を共にしてきた社員が離散することは、敗戦という国家的事情によるとはいえ断腸の思いであった。操業停止が解除されたのは終戦から4か月が経過した12月頃で、残った従業員は清五郎を含め、たったの7名だけになっていた。



**SOUL**

### 「ソール」チャックの発売

ブランド名「ソール」は材料・熱処理方法・製造ノウハウを研究し、欧米製品に負けない高品質をめざし、真心（魂）を込めた製品という思いから名づけられた。

## 従業員7名からの再出発

**終**戦からしばらくしても苦しい状況は好転の兆しを見せなかった。ひとまずチャック生産を再開したものの、物価の猛烈な高騰、極度の資材不足、燃料・電力供給の制限など悪条件が重なり、清五郎は筆舌に尽くしがたい苦悩の日々を送った。

同時に、圧倒的に不足していたのは人手であった。チャックの生産を再開すると同時に社員を募集したが、混迷を極める社会情勢から採用は遅々として進まなかった。そこで、清五郎は状況を打破するため、社員募集の要件の中に『食糧の配給』という項目を設けた。

当時、国からの配給は成人一人一食あたりお茶碗一杯足らずの芋や豆だけであった。常に空腹と闘いながら日々の業務にあたっていた従業員たちに対し、清五郎は日常業務として工場敷地を耕作し野菜を育て、食糧自給を図るよう命じた。もちろん、社員達の空腹を完全に満たすような量を収穫することはできなかっただろうが、終戦直後の空腹の国民にとっては十分魅力的な労働条件であった。

こうした苦労の末、ようやく最低限の人数を確保できた帝国チャックだったが、会社を取り巻く情勢は依然としてどん底の状態であった。「日本の機械工業はもうダメだ」、「旋盤チャックなど、誰も何の用もない」という声を聞くこともあったが、一度は花開いた日本の機械文化が簡単に絶えることはないと感じていた清五郎は、不退転の覚悟をもってチャックの製造を続けていった。



1939（昭和14）年頃の寺坂鉄工所正門と事務室



1947（昭和22）年頃の工場全景

## 荒波を超え、トップメーカーへ

**帝** 国チャックに曙光が差し込み始めたのは、終戦から3年後の1948（昭和23）年のことであった。国の工作機械中央計画生産にもとづき、商工省（現・経済産業省）機械局の指定工場に選ばれたのである。資材不足や電力不足は、依然として工場運営を苦しめたが、日本のために製品を作ることができることは何物にも代えがたい希望であった。

そうして、徐々に勢いを取り戻していった帝国チャックと日本経済であったが、そこに冷や水を浴びせたのがアメリカ・デトロイト銀行の頭取ジョゼフ・ドッジ氏による超デフレ政策、通称ドッジ・ラインであった。インフレからデフレへと一気に傾いた結果、日本経済は深刻な不況に陥り、大企業によるリストラや中小企業の倒産が相次いだ。需要の低迷は帝国チャックにも大きな影響を及ぼし、膨大な在庫の山に清五郎は頭を悩ますこととなった。

しかし一方で、国内需要の低迷は、企業の目を海外へと向けさせる機会となった。帝国チャックは1949（昭和24）年、初めてインドへ製品を輸出すると、次いで台湾・韓国等へも販路を拡大していった。国内においても、強力な販売網の形成に尽力していった帝国チャックは、1950（昭和25）年には今と変わらぬ代理店網を確立し、相互信頼を軸に「ソール会」として現在まで代理店制度を継続させている。

その後、帝国チャックは様々な時代の荒波に揉まれながらも、全社一丸となった弛まぬ努力で飛躍を続け、オーダーメイドチャックの国内トップメーカーとして現在に至っている。



「ザル碁にへまはつきもんや」

昭和30年頃、昼休み時間の帝国チャックの社長室からは、「パチリ、パチリ」と碁を打つ音が響いていた。清五郎は、「昼休みに碁をやらんか?」と社員に声をかけて社長室に呼び出すと、碁盤を挟んで様々な話をしていたという。

## 受け継がれる「魂智和」の教え

**資** 源に乏しい日本にとって「企業は人なり」という言葉には他国以上の重みがある。そのように考えていた清五郎は、人材育成を第一として、1939（昭和14）年、「私立寺坂工業青年学校」を設けて、若い従業員たちに工業高校レベルの教育訓練を施した。その後、法改正などにより校名を「帝国チャック(株) 事業内職業訓練所」と改め、160名以上の修了生を輩出し、同社の発展を支える布石となった。

社員教育で大切にしていたことは「各人の成長ぶりを待つことができる匠を育てる」ことだった。教える側はつい口を出してしまいたくなるが、それを堪え、後進がのびのびと成長できる環境を維持し続けた結果、今日の『匠』集団たる帝国チャックの姿に繋がっていった。

本社正門近くの石碑には、清五郎のものづくりへの想いが記されている。社是である「魂智和」（『魂』＝真心のこもった製品を提供する、『智』＝全知識を結集して技術を開発研磨し幸福な職場を作り出す、『和』＝愛と信を両翼として希望ある人生を築く）は、清五郎の残した大切な教えとして、今なお同社の中に受け継がれている。



勲五等双光旭日章を授与

1966（昭和41）年、清五郎は事業の発展・国産化への貢献、およびJIS規格制定への尽力といった功績により勲五等双光旭日章を授与された。

